

企画展「彦根藩井伊家と能楽」展示作品リスト

※ 作品21 — 9月18日(金)～10月3日(土)の期間展示
 ※ 作品22 — 10月4日(日)～10月19日(月)の期間展示

番号	指定	名称	筆者	年代	数量	所蔵	作品概要、展示箇所の内容等
1 江戸幕府の式楽・能							
1	重文	ろうじゅうれんしよほうしよ いいげんぼのかみ(なおとみ)あて富宛 老中連署奉書 井伊玄蕃頭(直)		江戸時代 (天明7年[1787]4月23日)	1通	彦根城博物館 (彦根藩井伊家文書)	せいし なおとみ いえなり 世子直富に、將軍宣下(11代將軍家齊)の祝儀能への出席を命じる。
2 彦根藩井伊家における能の受容							
◆井伊家の能の黎明期							
2		いいねんぶ 井伊年譜 巻2 (天正17年[1589]7月26日条)		江戸時代	1冊	彦根市立図書館	なおまさ すんぶ とくがわいえやす 初代直政、駿府の私邸に徳川家康を招き能十番を催す。
3		いいねんぶ 井伊年譜 巻7 (正保2年[1645]11月3日条)		江戸時代	1冊	彦根市立図書館	なおたか せいし いえつな とぎよ 2代直孝、江戸上屋敷への將軍世子家綱の渡御にあたり、伊達秀宗に依頼し能を催す。
4		いいねんぶ 井伊年譜 巻9 (貞享3年[1686]条)		江戸時代	1冊	彦根市立図書館	なおおき きた 4代直興、喜多流を中心に55人の能役者を召し抱える。
参考		のうのくんもうずい 【写真】能之訓蒙図彙 巻3		江戸時代 貞享4年(1687)初版、元禄14年(1701)刊	1冊	国立国会図書館	京都在住の役者の中に井伊家お抱えの役者が記載される。
◆能の定着と喜多流の普及 ～10代直幸							
5	重文	きむらいじゅうゆいしよちょう 侍中由緒帳 巻1 (寛延2年[1749]2月22日条)		江戸時代	1冊	彦根城博物館 (彦根藩井伊家文書)	なおさだ なおまさ おんき 8代直定、木俣家屋敷にて初代直政の150年遠忌祝儀能を催す。
6		きたちかよししよじょう 喜多親能書状 武藤小兵衛宛		江戸時代 (寛延2年[1749]～宝暦4年[1754])	1通	彦根城博物館 (井伊家伝来典籍)	せいし なおひで きた ちかよし 世子時代の10代直幸、喜多流宗家8世親能に弟子入りする。
7	重文	そばやくごようどめ 側役御用留 (宝暦7年[1757]正月16日条)		江戸時代 宝暦7年(1757)	1冊	彦根城博物館 (彦根藩井伊家文書)	なおひで まつはやし 10代直幸、表御殿御座御間で松囃子を行う。
8	重文	でんちゅうさほうむき 殿中作法向		江戸時代 宝暦7年(1757)頃	1冊	彦根城博物館 (彦根藩井伊家文書)	御殿での年中行事の作法について記す史料。まつばや 子の記載がある。
9	重文	そばやくにつき 側役日記 (安永9年[1780]11月9日条)		江戸時代 安永9年(1780)	1冊	彦根城博物館 (彦根藩井伊家文書)	はやし なおひで にわごろう なお 表御殿での囃子で、10代直幸と庭五郎(後の11代直中)が舞をつとめる。
参考		たろうじろう 【写真】太郎次郎	おかもとせつさい 岡本節齋筆	江戸時代 明和5年(1768)編、弘化3年(1846)11月写	1冊	法政大学鴻山文庫	彦根藩士・岡本節齋(宣久)による喜多流謡伝書。節齋は、喜多流宗家7世の定能の弟子。
10		せいけびだん 井家美談 巻9		江戸時代	1冊	彦根城博物館 (井伊家伝来典籍)	なおひで せいし なおとみ 10代直幸の世子直富の能に関する逸話を掲載。
◆井伊家の能の最盛期 ～11代直中から12代直亮、13代直弼							
【11代直中】							
11	重文	ひろこうじおやしきとめちよう 広小路御屋敷留帳 (天明元年[1781]4月28日条)		江戸時代 天明元年(1781)	1冊	彦根城博物館 (彦根藩井伊家文書)	しよし なおなか うたい つづみ 庶子時代の11代直中、謡、鼓の修養に励む。
12		きたみつちかしよじょう 喜多盈親書状 今村市之進・酒居三郎兵衛・今村平吾宛		江戸時代 寛政12年(1800)	1通	彦根城博物館 (井伊家伝来典籍)	なおなか きた 11代直中の能謡の皆伝にあたり、喜多流宗家10世みつちか せいし 盈親が誓詞を求める。
13		ようきよくあくまばらい 謡曲悪魔払	きたひさよし 喜多古能著	江戸時代 天明7年(1787)8月跋	1冊	彦根城博物館 (井伊家伝来典籍)	きた ひさよし 喜多流宗家9世古能による喜多流の謡伝書。
14		きたりゅうたいぼん 喜多流謡本		江戸時代	30冊	彦根城博物館 (井伊家伝来典籍)	きた 喜多流の謡本。
15	重文	ごじょうしよりあいとめちよう 御城使寄合留帳 (寛政11年[1799]12月26日条)		江戸時代 寛政11年(1799)	1冊	彦根城博物館 (彦根藩井伊家文書)	なおなか きた おりえ 11代直中、喜多流宗家の甥・織衛をはじめ7人の能役者を召し抱える。
16	重文	くろごもんさきおやしきにつき 黒御門前御屋敷日記 (寛政12年[1800]12月18日条)		江戸時代 寛政12年(1800)	1冊	彦根城博物館 (彦根藩井伊家文書)	彦根城表御殿の能舞台の舞台開きが行われる。
17	重文	おもてごてんず 表御殿図		江戸時代後期	1枚	彦根城博物館 (彦根藩井伊家文書)	能舞台が描かれた表御殿の絵図。
参考		のうぶたいしつくいます 【写真】能舞台漆喰枱				彦根市文化財課	表御殿能舞台に作られた床下の漆喰枱の発掘写真。
18	重文	おもてごてんおのうはいけんせきず 表御殿御能拝見席図		明治20年(1887)	1枚	彦根城博物館 (彦根藩井伊家文書)	表御殿能舞台で能を拝見する際の席順をあらわした絵図。
19		のうめん おきな (はくしきじょう) 能面 翁(白色尉)		室町時代	1面	おおきみきそじんじや 大皇器地祖神社	なおなか きみが 寛政3年(1791)の領内巡見の際、11代直中が、君ヶ畑村(現 東近江市君ヶ畑町)で見た能面2面の内、1面にあたると考えられるもの。

	20	のうめん えんめいかじゃ 能面 延命冠者		室町時代	1面	おおきみきじそじんじゃ 大皇器地祖神社	寛政3年(1791)の領内巡見の際、11代直中が、君ヶ畑村(現 東近江市君ヶ畑町)で見た可能性のある能面。
※	21	のうしょうぞく べにじはなからくさいりひし 能装束 紅地花唐草入菱文様 もんようからおり 唐織		桃山時代	1領	まんどころはちまんじんじゃ 政所八幡神社	寛政3年(1791)の領内巡見の際、11代直中が見た可能性がある能装束。
※	22	のうしょうぞく しろじかいもくさばなしきしもん 能装束 白地貝藻草花色紙文 かたすそぬいはく 肩裾縫箔		桃山時代	1領	まんどころはちまんじんじゃ 政所八幡神社	寛政3年(1791)の領内巡見の際、11代直中が見た可能性がある能装束。
	23	つづみたいこならびにしょうぎちよう 鼓太鼓并床机帳		江戸時代後期	1冊	彦根城博物館 (彦根藩井伊家文書)	こつづみ おおつづみ 小鼓・大鼓・太鼓および床机の道具帳。
	24	おすえまちおやしきおつきかたにつき 尾末町御屋敷御付方日記 (文化13年[1816]閏8月22日条)		江戸時代 文化13年(1816)	1冊	彦根城博物館 (彦根藩井伊家文書)	隠居した11代直中、隠居屋敷の榎御殿にも舞台を建て、囃子を催す。
	25	のうめん いしおうじよう 能面 石王尉		江戸時代	1面	おおてまちぐみことぶきざん 大手町組壽山	文政8年(1825)の直中の還暦を祝う長浜の曳山狂言上覧に際し、直中が下賜した能面。
	26	のうめん はなこぶあくじよう 能面 鼻瘤悪尉		江戸時代	1面	きたまちぐみせいかいざん 北町組青海山	文政8年(1825)の直中の還暦を祝う長浜の曳山狂言上覧に際し、直中が下賜した能面。
	27	のうめん こおもて 能面 小面		江戸時代	1面	うおやまちぐみほうおうざん 魚屋町組鳳凰山	文政8年(1825)の直中の還暦を祝う長浜の曳山狂言上覧に際し、直中が下賜した能面。
参考		【写真】ひこねはんのうめんかしじょううつし 彦根藩能面下賜状写		江戸時代後期	1通	きたまちぐみせいかいざん 北町組青海山	文政8年(1825)の直中の還暦を祝う長浜の曳山狂言上覧に際し、直中が下賜した能面の一覧。
【12代直亮】							
	28	そばやくにつき 側役日記 (文化9年[1812]12月16日条)		江戸時代 文化9年(1812)	1冊	彦根城博物館 (彦根藩井伊家文書)	12代直亮の入部祝賀能が3日にわたって行われ、家老など上席の藩士から歩行まで、大勢が拝見する。
	29	かみやしきごてんむきえず 上屋敷御殿向絵図		江戸時代 天保3年(1822)6月	1枚	彦根城博物館 (彦根藩井伊家文書)	江戸上屋敷の絵図。能舞台が追記されている。
	30	のうめんこころおぼえき 能面心覚記	いいなおあき 井伊直亮筆	江戸時代後期	1冊	彦根城博物館 (井伊家伝来典籍)	12代直亮自筆の能面道具帳。
参考		【写真】のうめんのうつし 能面之写	きしきゅうがく 岸九学写	明治時代	1冊	宮内庁書陵部宮内公文書館	12代直亮が購入した能面を描いた絵巻の一部を、写したものの。
参考		【演能写真】たぬきのほらつづみ 狸腹鼓				茂山狂言会	おおくら 大蔵流の狂言(狸腹鼓)の演能写真。
	31	つぎようのうしょうぞくもくろく 次用能装束目録		江戸時代後期	1冊	彦根城博物館 (彦根藩井伊家文書)	能面、能装束、能小道具に関する道具帳。
	32	のうめんきりがた ほんめんどうじ 能面切型 本面童子		江戸時代	1式	彦根城博物館 (井伊家伝来資料)	能面の写しを作る際に使用する道具。
	33	おいまつず かがみいた 老松図(鏡板)		江戸時代後期	1式	りょうとくじ 了徳寺	ぬきな 藩士貫名家の舞台の鏡板と伝えるもの。
【13代直弼】							
	34	さむらいじゅうゆいしよちよう 侍中由緒帳 巻3 (安政6年[1859]3月1日条)		江戸時代	1冊	彦根城博物館 (彦根藩井伊家文書)	江戸上屋敷にて、2代直孝の200年遠忌および13代直弼の太老就任を祝い、能が行われる。
	35	ようきよくそうこう つくまえ 謡曲草稿 筑摩江		江戸時代後期	1冊	彦根城博物館 (彦根藩井伊家文書)	13代直弼が自作したとされる謡曲(筑摩江)の草稿。
参考		【演能写真】つくまえ 筑摩江				横浜能楽堂	復曲された能(筑摩江)の演能写真(喜多流)。
	36	きょうげんそうこう あだちおんな 狂言草稿 安達女		江戸時代後期	1冊	彦根城博物館 (彦根藩井伊家文書)	13代直弼が自作したとされる狂言(安達女)の草稿。 (安達女)は、現行の(鬼ヶ宿)。
参考		【演能写真】おにがやど 鬼ヶ宿				茂山狂言会	おおくら 大蔵流の狂言(鬼ヶ宿)の演能写真。
	37	のうしょうぞく ちやじたいこかわつなぎにきくお 能装束 茶地太鼓革繫ぎに菊折 りえだもんようからおり 枝文様唐織		江戸時代	1領	彦根城博物館 (井伊家伝来資料)	明治11年(1878)の道具帳に記載される唐織に該当するもの。
3 彦根藩井伊家の能を担った人々							
	38	のうやくしゃゆいしよちよう 能役者由緒帳		江戸時代後期	1冊	彦根城博物館 (彦根藩井伊家文書)	井伊家お抱えの能役者の由緒・履歴書。
	39	のうやくしゃさしがみりやつき 能役者指紙略記		江戸時代後期	1冊	彦根城博物館 (琴堂文庫)	能役者に関する支出などに関する指示をまとめたもの。
	40	ひこねはんからうれんしよたつしよ 彦根藩家老連署達書		江戸時代 (文化元年[1804])11月3日)	1通	彦根城博物館 (四十九町代官家文書)	彦根城下の町人、宮田五一郎、中村九左衛門を、藩の町役者に任じる。
4 近代の彦根と能							
	41	いじんじゃほうのうのうぼんぐみ 井伊神社奉納能番組		昭和6年(1931)6月1日	1枚	彦根城博物館 (井伊家伝来古文書)	15代直忠が、井伊神社の能舞台で行った奉納能の番組。
	42	ひょうしばん きたりゅううたいほん 拍子盤および喜多流謡本		謡本:昭和4年(1929)刊 拍子盤:昭和時代初期	1式	彦根城博物館	彦根の旧家に伝来した拍子盤と喜多流謡本。

作 品 解 説

1 側役御用留 (宝暦7年[1757]正月16日条) 1冊 (作品リストNO. 7)

重要文化財

縦 29.6cm 横 20.8cm

江戸時代 宝暦7年 (1757)

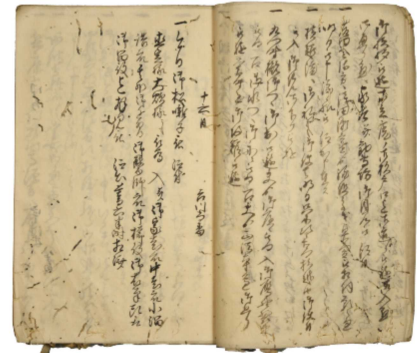
当館蔵 (彦根藩井伊家文書)

井伊家10代直幸 (1731~1789) は、藩主となる以前に喜多流宗家に弟子入りするなど、早くから能に強い関心を寄せていました。直幸が藩主になると、井伊家の演能記録は急激に増加します。直幸は、面・装束を身に着けずに曲の後半を演じる囃子を度々催し、自らも舞を舞い、鼓を打ちました。

直幸はまた、御殿での正月の行事である松囃子を定例化しています。現在確認される最も早い松囃子の記録は、「側役御用留」に記された宝暦7年 (1757) 正月16日で、表御殿御座之間に仮設の舞台である敷舞台を設けて実施されました。これ以降も、直幸は正月15日前後に松囃子をおこなっており、直幸以降の演能記録からも、井伊家における松囃子の定着が確認できます。



(表紙)



(展示箇所)

2 黒御門前御屋敷日記 (寛政12年[1800]12月18日条) 1冊 (作品リストNO. 16)

重要文化財

縦 14.5cm 横 41.0cm

江戸時代 寛政12年 (1800)

当館蔵 (彦根藩井伊家文書)

彦根城博物館の中央に位置する能舞台は、明治時代初期以降、市内の神社などに移築されていた彦根城表御殿の能舞台を、元の場所に移築復元したものです。この表御殿の能舞台は、寛政12年 (1800) 12月18日に舞台開きが行われました。この時の藩主は、井伊家歴代の中でも特に能を愛好した11代直中 (1766~1831) で、幼少から謡や鼓の修養を重ね、父である10代直幸と同じく喜多流宗家の弟子となりました。

直中の弟の勇吉などが暮らす、黒御門前屋敷付きの藩士が記した日記には、この舞台開きの様子が記されています。勇吉たちは、明け六つ時 (午前7時) 過ぎに表御殿に上がり、藩主である直中に対面した後、現在の博物館の正面見所にあたる場所にて能を拝見し、能が終わった後、直中に御礼を述べ、暮六つ半時 (午後6時) に屋敷に帰りました。舞台開きの能は、一日かけて行われたこと



が分かります。当日の演目や役者については触れられていませんが、この前年、寛政11年（1799）に、直中は、喜多流宗家の甥をはじめとする7人の役者を召し抱えていることから、おそらくこの役者が動員されたものと考えられます。

これ以後、初代直政や2代直孝の250回忌といった先祖の遠忌、藩主の家督相続、藩主就任後に初めて彦根へ入る入部、還暦の年賀など、様々な行事に伴う能が、表御殿の舞台で行われました。

3 表御殿御能拝見席図 1枚（作品リストNO.18）

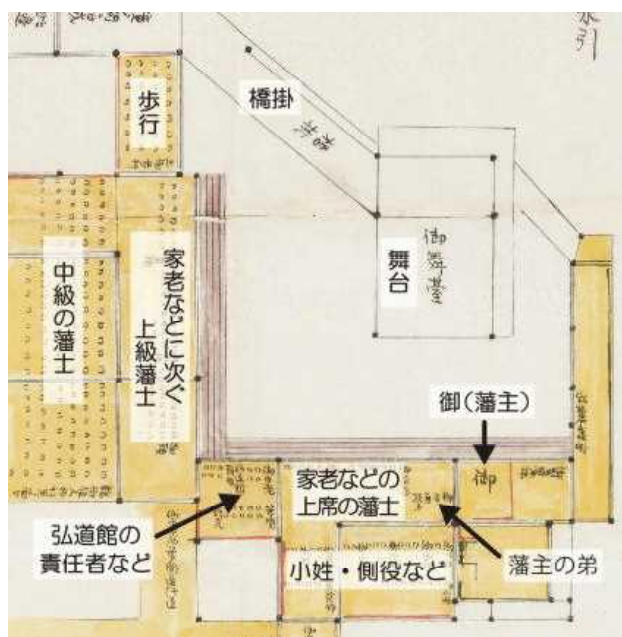
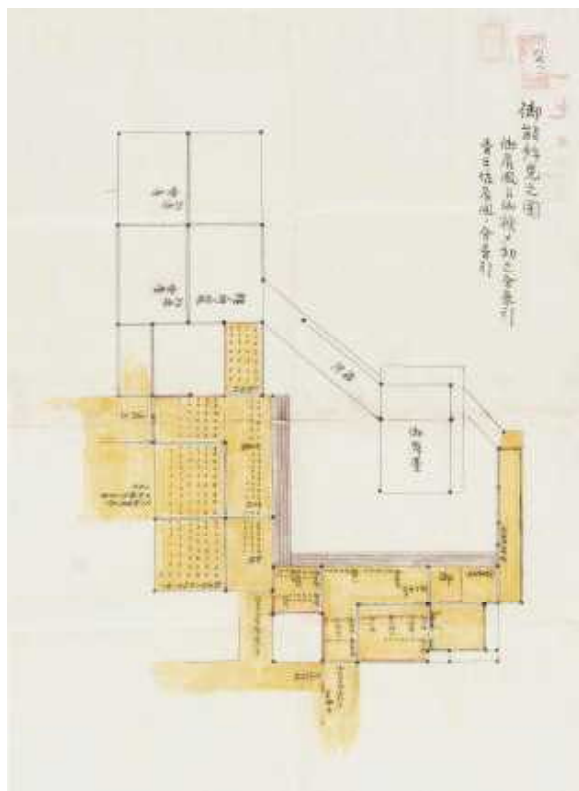
重要文化財

縦 39.8cm 横 55.9cm

明治20年（1887）

当館蔵（彦根藩井伊家文書）

表御殿の能舞台で、能を拝見する際の席順を表した絵図。江戸時代の記録を元に、明治時代に作成されました。藩主の席は、能舞台に向かって右前方の「御」と記された場所です。藩主の右手側と背後には、屏風あるいは襖が立てられました。この位置からは、舞台上だけでなく、舞台左奥の橋掛もくまなく見渡すことができます。藩主の左側にはその弟たちが坐り、これに続いて家老や中老などの上席の藩士が並びます。その後ろには、小姓や側役といった藩主の側近くに仕えた藩士が坐りました。上席の藩士の席に続く、能舞台を左斜めから見る場所は、藩校弘道館の責任者である頭取などの席。舞台左側面の脇見所にあたる場所の前列には、物頭や番頭といった、家老などに次ぐ上席の藩士、その後ろには中級の藩士である諸役人が並びます。橋掛と接する、舞台を後方から見る場所は、戦闘の際に馬に乗らず徒歩で参加する歩行の席となっています。このように、藩主の左から順に、家格や身分によって席順が細かく決まっていたことが分かります。規模の大きな演能の際には、このように大勢の藩士が居並んで能を拝見したのでしょうか。



【参考】能を拝見する際の席順

- 4 能面 石王尉 1面 (作品リストNO. 25)
 面長 21.0cm 面幅 15.7cm 面奥 10.3cm
 江戸時代
 大手町組 壽山蔵
- 5 能面 鼻瘤悪尉 1面 (作品リストNO. 26)
 面長 20.2cm 面幅 16.3cm 面奥 10.6cm
 江戸時代
 北町組 青海山蔵
- 6 能面 小面 1面 (作品リストNO. 27)
 面長 21.3cm 面幅 13.5cm 面奥 7.0cm
 江戸時代
 魚屋町組 鳳凰山蔵

文政8年(1825)11月18日および19日、前藩主直中の六十賀を祝い、直中の隠居後の住まいである榎御殿にて長浜の曳山狂言(歌舞伎)が上覧されました。この時、二つの曳山が榎御殿まで運ばれました。輸送方法に関する記録は確認されていませんが、船で運ばれたのではないかと推測されます。当時、長浜の曳山には、一部を除き名前がありませんでしたが、直中が各山の名称を尋ねたため、全ての山に名前が付けられました。この上覧の褒美として、直中から下賜された能面が、現在も各山組に伝来しています。

壽山と青海山は、文政8年に名付けられた山で、壽山は彦根まで運ばれた曳山の一つ。壽山の石王尉は、老体の神の役や老木の精などの役で用いる面、青海山の鼻瘤悪尉は、猛々しい力を秘めた年老いた神の役で使用する面です。鳳凰山所蔵の小面は、下賜された中で唯一の女面で、若く美しい女を表しています。

江戸時代、彦根藩井伊家が所蔵していた能面や能装束は、明治時代以降、東京に移った井伊家本邸で保管されていたため、大正12年(1923)の関東大震災で、そのほとんどが失われてしまいました。これら各山組に伝来する能面は、江戸時代の井伊家が所蔵していたことが明らかな作例として、非常に貴重なものです。



4 能面 石王尉
 (大手町組 壽山蔵)



5 能面 鼻瘤悪尉
 (北町組 青海山蔵)



6 能面 小面
 (魚屋町組 鳳凰山蔵)

7 ^{のうやくしやゆいしよらう}能役者由緒帳 1冊 (作品リストNO. 38)

重要文化財

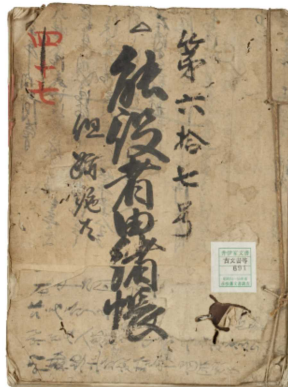
縦 29.6cm 横 22.3cm

江戸時代後期

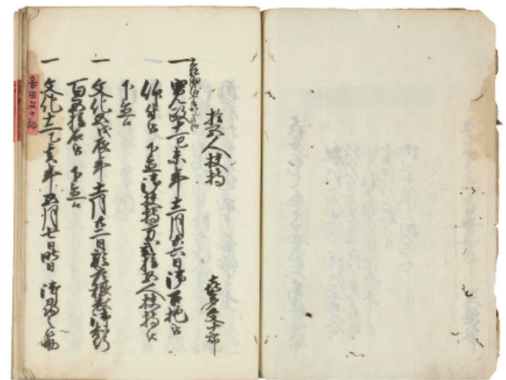
当館蔵 (彦根藩井伊家文書)

寛政11年(1799)12月26日、11代直中^{なおなか}は、喜多流宗家の甥である織衛^{おりゑ}をはじめ、7名の役者を召し抱えました。本史料は、これ以降に井伊家のお抱えとなった役者の由緒や経歴を、家ごとに記したものです。織衛にはじまる喜多家を筆頭に、断絶、御暇となった家も含めて28家が記されており、最も多い嘉永年間(1848~1854)には21家が雇用されていたことが分かります。本書のなかには、大蔵流の狂言役者、茂山千五郎^{しげやません ころう}が、12代直亮^{なおあき}(1794~1850)の代である天保13年(1842)10月18日に召し抱えとなったことも記されています。

これらお抱えの能役者は、井伊家が行う能に出演するのは勿論、藩主やその子弟への能の教授に加え、町役者への指導、あるいは能道具の鑑定なども行いました。



(表紙)



(展示箇所)